

前置詞 by の意味

—— ひとつの意味を求めて ——

嶋 田 裕 司

群馬県立女子大学紀要 第34号 別刷

2013年2月

Reprinted from

BULLETIN OF GUNMA PREFECTURAL WOMEN'S UNIVERSITY No. 34

FEBRUARY 2013

JAPAN

前置詞 by の意味

—— ひとつの意味を求めて ——

嶋 田 裕 司

1. はじめに

前置詞の意味は、それが多義的であることを前提として記述されている。ひとつの前置詞の意味は、文脈に応じた様々な意義から成り立っており、それらの意義が互いに結びついてネットワークあるいは放射状構造を形成していると一般に考えられている。その中心には、カテゴリーのプロトタイプすなわち典型的な意義があり、そこから派生するものとして様々な意義があるとされている。意義の派生が線的に繰り返されれば、意義の関係は薄れていくことになる¹。

このようなモデルによって前置詞の意味を捉える場合に問題になることは、前置詞自体の意味と文脈の担う意味を、どの程度分離するのかということである。文脈から理解できる意味を前置詞の意味に取り込むのであれば、前置詞の意味が多様になり、意義のネットワークが複雑になる。逆に、文脈の意味を出来るだけ分離するのであれば、前置詞の意味は単純になる。そこで、ネットワークモデルに基づいた意味研究において、基本的意義と派生的意義を認める際には、その根拠を明確にすることが必要になる。根拠がなければ、意義の分化は認められない。したがって、前置詞の意味研究は、究極的には単義説 (monosemy) を目指すべきである。その試みが維持できなくなったとき多義説を受け入れることになる。最初から多義説を受け入れていると、意義と意義の関係の分析がおろそかになる。

本論文は、前置詞 by には意味がひとつしかないことを示す試みである²。多様な意義があるように見えるのは、by がイメージスキーマとメタファーを介して様々な領域に写像されるからであり、各領域の中で領域固有の解釈を与えられるからである。by には、3次元空間において具体的経験を通して認識できる区域の意味があるのみである。この意味が、時間領域に写像されたり、〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマの内部に取り込まれて、様々な領域で用いられたりすることによって、by の一連の用法が展開する。

by には意味がひとつしかないと言っても、全ての使用法を包括する抽象的な意義をひとつ認めると言っているのではない。by の意味は、3次元物理空間における身体的経験によって形成された具体的意味である。その意味が、抽象的な概念構造の中に比喩的に持ち込まれて、by の抽象的な使用法が生じるのである³。

2. by の具体的意味

前置詞 by の様々な使用法の中で最も具体的なものは、人の生活する空間の中に物事を位置づける用法である。この用法において、話者は、自らの分身を認知の主体としてその空間内に置き、主体はそこから by の目的語が表す対象を見て、その側面を基準にし、by の指定する区域を認識する。たとえば、つぎの (1a) の文において、話者が by the river という表現を理解する際には、川の見える場所に認知の主体を置き、主体はそこから見渡して、川の側面 (すなわち川と陸の境界線) の傍らにある陸の上を by が指定する区域であると認める。このとき、by が指定する区域は、認知主体と川の間が存在することになり、川の中にあるのでも、主体から見て川の対岸にあるのでもない。

by が指し示す場所は、主体の視座から見える側面の視座側にある。つまり、私が視座にいれば、その場所は川のこちら側ということになる⁴。

- (1) a. There are a few benches by the river....
 b. ...he is still away in her summer house by the lake.
 c. I was lucky enough to get a seat by the window overlooking the right wing.

同様のことは、(1b) にも当てはまる。by the lake を理解するとき、認知主体が湖畔にいて湖とその周辺を見渡し、目の前に見える岸辺を by の区域と認めて夏の別荘を位置づけている。また、(1c) においては、文脈から推察すると、主体の視座は飛行機の客室内にあり、by the window が示す位置は、そこから見た窓の傍らにある。視座から見える窓は、機体の内側であり、指定される場所も当然内側ということになる。これらの例が示しているのは、前置詞 by が区域を指定するためには、by の目的語となる対象のみならず、その場面全体を認識する人の視座が決定的な役割を果たすということである。by の区域は、視座から見える側に指定される⁵。

本論文では、上の (1) のように、認知主体が身体的に場所を指定する用法が by の意味であると仮定する。その他の用法は、by の意味に対して何らかの認知的過程が加わることによって生じた現象であると考えられる。by の意味は、身体的経験から得られるスキーマであり、意味をベースとプロファイルによって捉える概念化を採用すれば、by の意味作用とは、人の生活する空間をベースとして選択し、そこに見えるものの傍らを区域として指定することであるということになる。

3. by の時間的用法

前置詞 by が時間に関して用いられると、by の目的語が表す時々の前に、あるいはその時々までにはと解釈される。LDCE5の定義によれば、〈特定の時の前に〉(before or not later than a particular time) となる。物理的空間において対象の傍らを示す by が、時間の概念上では、ある時の前を表すことになり、その後を表すことはない。たとえば (2a) の文は、次の土曜日になる前に返事を受ける事態が成立するだろうと言っている。また、(2b) は、彼らが既に知っているにちがいないということであり、(2c) は、教会に消防士が到着した時には既に火が回っていたということである。

- (2) a. ...maybe we'll get an answer by next Saturday.
 b. ...they must know it by now.
 c. The church was well alight by the time fire crews arrived.

それでは、なぜ前置詞 by は、時間領域において特定の時間の前を表し、その後を表さないのだろうか。この問いには、メタファーの存在によって答えることができる。時間的概念の一部が、メタファーを介して空間的概念によって構成されていることはよく知られている。前置詞 by の時間的解釈の際にも、物理空間を起点領域 (source domain) とし時間为目标領域 (target domain) とするメタファーがあることを前提とすれば、〈特定の時の前に〉という by の時間的解釈が得られる。by の解釈に必要な時間概念は、次のように空間概念によって構成されていると仮定しよう。人は線的な時間の広がり (つまり時間の道) を過去から未来に向かって進んでいる。過去は自分の背後に連なり、未来は自分の前方に延びている。近い未来は近くにあり、遠い未来は遠くにある。このよ

うな時間の概念は、日常経験において、物理空間内の経験と重なっている。すなわち、物理空間内を遠くに行けば行くほど、時間が相応にかかることを話者は知っている⁶。

さて、前述の具体的な物理空間における by の意味を、主体と対象と区域という三つの要素の関係を保持したままで、時間の領域に持ち込んでみよう。この写像によって、物理空間における認知主体は、時間領域においては、時間の道を前進する人に対応することになる。物理空間において by の目的語が示す対象は、時間領域では、next Saturday や now などの期間や時点に対応することになる。さらに、物理空間では、認知主体は、対象を見て自分から見える側面に基づいて、by の指定する区域を認識していた。このことも時間領域にそのまま持ち込まれることになり、この主体は、時間の道の上にある期間や時点のうち、自分に近い側面を認め、その面の自分側に by の区域を認識することになる。すなわちメタファーの存在を認めれば、by の物理空間における意味に何も変更を加えずに、〈特定の時の前〉が by によって選ばれることになる。

4. 区域と移動経路

時間用法の by の解釈にあたって、物理的空間で経験される by の意味に何ら変更を加えずとも、メタファーによって〈特定の時の前に〉という解釈が生じることを上で見てきた。ここからは、具体的な物理空間における by の用法に話を戻し、具体物が移動することを表す表現について考えていく。by の様々な用法を統一して理解する上で重要なことは、by の意味を移動経路から区別することである。by の本質的意味は by が指定する区域そのものであり、by が移動経路を表しているかに見える場合には、by の区域に移動経路が置かれているのである。

再び、具体的な物理空間における by の意味から話し始めよう。by の意味を理解する際には、その目的語の対象が存在する空間に認知主体も存在し、主体が対象を認識して、その傍らに区域を指定する。この区域が by の表しているもの、つまり by の意味である。たとえば、a table by the window という名詞句の場合、by の作用は the window を基にしてその傍らに区域を指定することである。注意すべきことは、前置詞 by が a table と the window というふたつの物の関係を直接的に表現しているのではなく、by the window の意味作用は区域を指定するところで終わり、意味を統合する別の作用によって、その区域に a table が位置づけられる点である⁷。一般に、前置詞の区域に位置づけられるものには、物体と事態のふたつの場合がある。たとえば、(3a) では a few benches という物体が by the river の区域に置かれている。それに対して、つぎの(3b)では You...just sit back という事態が by the river の区域に位置づけられるのであり、You という物体(人物)のみが by の区域にあるのではない。(3c)においても、物体ではなく、walking の表す事態が区域に位置づけられている。

- (3) a. There are a few benches by the river.... = (1a)
 b. You can just sit back by the river and relax.
 c. ...Mr Southall was in an accident while walking by the river.

(3c) のように事態が walking という移動の一種である場合には、walking という〈事態〉が by の〈区域〉に位置づけられているのではなく、by が移動の〈経路〉を直接表すという可能性も出てくる。すなわち、by は物体と静的事態には区域を指定し、移動に対しては経路を指定するという考え方である。そこで、by の単義説を維持するためには、この可能性を否定することになる。

この問題を考えるために、移動経路の表現を観察しよう。以下で示すことは、by の作用が、対象

に基づいて区域を指定することで終わり、移動経路は、by とは別の作用によって区域に位置づけられるということである。区域と経路の関係は、区域の中に経路が収まる場合と、区域に経路が収まり切らない場合の二種類がある。上の (3c) の例では、by の目的語が川 (the river) という比較的長い対象であるために、その指定する区域もそれに応じて長くなる。したがって、歩くこと (walking) によって生じる移動の経路がその区域に完全に収まるという解釈が容易に成り立つ。それに対して、つぎの (4a) の文の解釈は、我々がふたつの投票所の前を歩いて通り過ぎたということである。投票所が互いに離れた所であれば、我々が歩いた経路は、by が指定するそれぞれの投票所の傍らにある区域には収まり切らず、少なくともそれらを結ぶ経路も補って想像することが自然となる。同様に、(4b) の文は、彼がリングから降りて私の傍を歩いて通り過ぎた場面を描いているので、文全体の解釈としては、歩く経路は by me によって指定された区域には収まり切らず、彼が私に近づいて、傍らを過ぎ去って行くことが想像される。このように経路の長さが、文脈や場面によって異なることは、(4c) の例も示している。特殊な文脈が無ければ、She walked by the building. という文は、建物の傍らを通じたという解釈を受けて、by の区域より経路の方が長くなる場面を思い浮かべることが普通であろう。しかし、(4c) のような特殊な文脈では、彼女が頭に怪我をしたために歩き続けることができなかった場面も想像しやすくなる。つぎの (5) は、動詞が fly, pass, speed の場合であり、ここでも経路が by の示す区域を通過して延びるように解釈するのが自然である。

- (4) a. We walked by two busy polling stations.
 b. Half an hour earlier Rendall was in tears when he walked by me on the way out of the ring.
 c. A woman suffered head injuries when part of a brick was dropped on her head as she walked past a building. ... It is thought the brick was dropped from above as she walked by the building last Saturday. The victim was treated in hospital.
- (5) a. The Galileo spacecraft flew by Earth twice on its way to Jupiter.
 b. As they passed by me they both looked at me.
 c. ...a car sped by the parked vehicle...

これらの事例は、by の区域と移動経路は別々の概念であるということを示している。移動の経路は文脈によって想起され、その一部または全体が by の区域に位置づけられる。

上の例で観察した移動とその経路は、話者が日常生活の身体的経験を通して持つようになったイメージスキーマによって解釈されていると考えられる。このスキーマは、いわゆる〈起点-経路-到達点〉(Source-Path-Goal) のスキーマである⁸。人は、日常経験により、物が移動することを知っていて、その移動には始まりと途中と終わりが、この順にありうることも当然心得ている。上の例で by の区域に位置づけられたのは、このスキーマが具体化した移動の経路 (Path) であるということになる。

5. 空間の1次元化

上で観察した移動の経路は、3次元物理空間において、by の指定する区域に経路を位置づける場合であった。この節では、1次元の空間に by が区域を指定する場合を観察しよう。3次元空間であれば、その中に認知主体をおくことができるけれども、1次元空間 (つまり線の広がりだけの空間) では、認知主体は、その外側から線の空間を眺めることになる。その上、by の目的語の対象と

by が指定する区域とは、3次元空間においては隣接した別々の場所を占めるのに対して、1次元空間では、一本の線上に重なり合うことになる。このような解釈が必要な例として(6)の例がある。たとえば、(6a)の文では、彼らが教会に入るときに通ったのは、側面の入り口の傍らではなく、入り口そのものと解釈するのが自然である。また、(6b-e)の by the X door と by the window についても同様に、正面玄関、裏口、窓等の対象そのものを通過する解釈がなされる。

- (6) a. They entered the church by the side door...
- b. Instead of leaving by the front door, you left by the back door and slipped quietly into history.
- c. ...we've got embedded in our system a situation of the judges sending prisoners into prison by the front door and the executive releasing them by the back door...
- d. I went out by the wall door...
- e. They managed to escape the fire immediately. They escaped by the window.

ここで起きていることは、前置詞 by に新たな〈…を通過〉という意義が生じたのではなく、by が線的空間の内部で解釈された結果として、対象と区域が重なり合った解釈を受けたということである。これらの文の解釈は、次のように文頭から順に行われると考えてみよう。(6a)の場合、文の前半 They entered the church までを解釈した段階で、話者は、教会の外側と内側を想定した上で、〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマを用いて、外から内への移動を思い描く。このように描かれて、この段階で前景化(プロファイル)した移動経路の線上に、前置詞句 by the side door が区域を指定する。したがって、線的経路の上に描かれた対象と区域は、線の中に重なって収まらざるをえない。要するに、by は、〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマが想起されると、その線的空間内で対象を選んで区域を指定することになる。ここでは、移動経路と by の区域との関係が、3次元空間におけるのとは逆になっていて、経路の中に区域がある。

by が線的な移動空間内ではたらくのは、by の解釈に先立って線的空間が想起される場合に限定されると思われる。(6a-e)の例群から、by に先立って移動経路を描く表現を抜き出し、動詞を原形で表すと enter the church, leave, send prisoners into prison, release them, go out, escape となり、これらに共通する性質は、移動そのものを表すことである。これらの表現は建物や施設という大きな容器を背景にして、その外から内へ、または内から外へ移動する線的経路を描いている。つまり、表現それ自体に、〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマを想起させる力が備わっている。これとは対照的に、3次元空間で描かれた移動経路に用いられる動詞は、上の(4)と(5)によれば、walk, fly, pass, speed である。これらも移動を表しているけれども、その様態を表しているのであり、移動の背景に関する情報は乏しい。たとえば、walk は、人の姿勢と手足の動きと速さに関するある種のイメージを描くことが主であり、背景に関しては、せいぜい歩ける場所を描く程度である。enter や escape は、逆に、移動物体と背景との関係が変化すること以外の意味は持たない。

ところで、by のように線的な〈起点-経路-到達点〉スキーマの内部で「経路」の一部として解釈される前置詞は、他にあるのだろうか。through は、その候補に見える。たとえば、“through the front door” という前置詞句を検索すると、その句に先立って、(7)のように enter, go in, get out という移動表現が現われる。これらは(6)の例によく似ている。しかし、(8)のように移動の様態を表す walk, break, burst のような例も見られる。ここでは、移動経路のみならず、どのような様態で玄関を通ったのかが描かれている。

- (7) a. He entered through the front door....
 b. I went in through the front door.
 c. I tried to get out through the front door, but it was locked.
- (8) a. The owl calmly walked through the front door before flying off.
 b. Police broke through the front door to get into the house....
 c. ...the men burst through the front door of the property....

through については、(7) を解釈する際に 1 次元的空间で理解しても、3 次元的空间で理解しても、実質的な違いが生じないこと、また、(8) では、移動の様態が描かれていることを考えると、3 次元的空间で解釈がなされていると考えれば十分なかもしれない。いずれにせよ、線の移動空間内で by 以外の前置詞が用いられるのか、また、用いられるのであればどのような場合かという問題が見えてくる。この疑問は、これ以上追求せず、未解決のままとする。

話を by に戻して、by を線的な移動空間で用いる例をさらに見よう。このような使用法は、(6) の by the X door / window という形式に限らず、他の名詞句を目的語とする場合にまで広がっている。(9a) では、we...return が移動経路を想起させ、その途中に by a different route が指定する区域を位置づけている。(9b) では、政府が物資を運び入れるための移動経路が描かれて、その途中に by sea が区域を指定している。(9c) と (9d) では、メトニミーが生じていると考えられる。ここでは移動経路を描いた後で、その線上に場所としての区域を指定するのではなく、場所を通るための道具（つまり船と自動車）を指定している。

- (9) a. ...we should return by a different route....
 b. The government has been forced to ship in supplies by sea.
 c. ...the mints were transported by ship, not by air....
 d. Her Majesty arrived by car with the Duke of Edinburgh....

このような移動は、具体的な人や物が移動する点で、(6) の例によく似ていると言える。しかし、by の目的語に冠詞がつかない例があることから考えると、文全体が描く移動経路の抽象度が高まっているとも思われる。

6. 移動経路のメタファー

前節では、3 次元の物理空間で経験される by の基本的意味が、1 次元の移動空間の内部で解釈される場合について考察した。この 1 次元化は、by の意味の抽象化と見なすことができる。本節では、移動経路の概念すなわち〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマが、メタファーによって抽象的領域に写像される事例について考察する。3 次元の物理空間で経験される by の基本的意味が、1 次元の移動経路内で解釈され、さらに、その移動経路がメタファーを介して抽象的領域に写像されていると仮定したとき、初めて by の空間的意味と抽象的使用法の間を理解することができる。by には、具象の意味がひとつあるだけであり、様々な使用法は、その意味が抽象化とメタファーを通して現われた現象であることをこれから見ていこう。

6.1. 力の移動

物理的空間において、物が別の物に衝突するとき、力が一方から他方に加わると感じられる。物

が幾つもある場合には、衝突が次々に起きて、その連鎖を形成し、力はその都度次の物に伝わっていく。力が物から物へと伝わって（あるいは流れて）いくというこの概念を用いて、Langackerは文の主語と目的語を定義することを試みた⁹。その際に用いられた〈力の流れ〉(energy flow)という概念は、文法関係の決定に関与するばかりでなく、前置詞byの使用範囲をメタファーによって抽象的領域に拡張する際にも大きな役割を果している。力は、目に見えず、触れることもできない存在である。しかし、力は物から物へと伝わり、それを人は〈力の流れ〉として概念化する。流れは、移動の一種であり、それを理解するためには〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマが想起されることになる。

〈力の流れ〉という観点から見ると、身体の部分を示す用法と、受動文の行為者または手段を示す用法が、なぜ同一のbyという前置詞によって表されているのかが理解できる。はじめに、身体部分の用法、すなわち〈…の一部を持って〉ということを表す文を観察しよう。たとえば、(10a)では、彼が私を引っ張ったのであるから、力は彼から私に伝わることになる。認知主体は、〈起点-経路-到達点〉のスキーマを起動して、彼を起点とし私を到達点とする力の流れを思い描く。この線形的移動空間の途中にby the armが区域を指定し、この区域となる腕が経路の〈途中〉と解釈されることになる。

- (10) a. He pulled me by the arm....
b. She was pulled by the arm by one of the men....

つぎの(10b)は受動文となっていて、by句がふたつ含まれている。受動文は、その主語が力の流れの最下流として際立つことを表す形式である。認知主体は、下流の主語(She)から眺め始めて、中流にby the armを認め、さらにその後でby one of the menを認める。下流から見始めて、流れの中流部に身体部分の腕を、さらに行為者である男を位置づけている。すなわち、この文では、腕も男も流れの〈途中〉としてbyによって表されている。しかも、その順序が下流からの相対的距離を反映している。

(10b)における身体部分が表出されずに、行為者の部分が表現されると、(11a)のように被動者と行為者を持つ典型的な受動文となる。byの目的語は、(11b)のような動力源(蒸気機関車)、(11c)のような伝達具(ケーブル)として現われることもある。

- (11) a. She was pulled by a man into Radstock Road....
b. ...the train was pulled by a steam locomotive....
c. The train was pulled by a cable....

このように、順に(10)-(11)の用例を眺めてくると、いずれの文に現われるbyも力の流れの〈途中〉として理解できることがわかる。辞典などに記されている〈身体部位〉、受動文の〈行為者〉、〈手段〉などの記述は、前置詞byの意味そのものではなく、byが移動経路の内部に位置づけられて、その経路が具体的場面を構成する段階で、場面ごとにbyに与えられた呼び名である。

力の移動は、物理的な接触によるとは限らない。抽象的な力が、すなわち社会的な認知や心理的な影響力などが受動文の主語が表す〈到達点〉に伝わる場合もある。(12)では、このような抽象的な移動経路の〈途中〉をby句が指定している。

- (12) a. ...he was seen by many as a clean politician....

- b. The planet was discovered by an international team of 60 astronomers....
- c. ...she was angered by the decision of the court.

(12a) では、ある種の社会的認知が彼に伝わり、(12b) では、認知状態の変化がその惑星に伝わり、(12c) では、心理的影響が彼女に伝わる。その伝導経路がそれぞれ by によって示されている。

上の〈力の流れ〉は、pull, see, discover, anger などの動詞が表していた。つぎに、文の主動詞が表す流れとは別に、何らかの流れを設定すべき事例を観察しよう。(13)は、いずれも、by が動名詞を目的語としてとる例である。(13a) の場合には、動詞が表す〈力の流れ〉によっても説明ができる。つまり、(13a) では、人がカメラを壊したのであるから、物理的力が人物からカメラに伝わる。さらに、by がその移動経路の〈途中〉を指定するのであるから、カメラを太陽に向けることがその経路となっていると分析することもできる。しかし、(13b-c) に対して同様な説明を与えることには無理があるように思われる。(13b) の he began と (13c) の Mr Jones survived という表現においては、力の移動が認めにくく、そこには状態の変化または継続があるのみであると思われる。

- (13) a. Alan Bean broke the camera...by pointing it directly at the sun.
- b. ...he began by saying sorry for past mistakes.
- c. Mr Jones survived by drinking melted snow.

そこで、これらの文には、主節の事態と by 句の事態のふたつがあるので、これらの関係を理解するために、次のように仮定しよう。認知主体は〈起点-経路-到達点〉のスキーマを用いて事態の連鎖を構成し、事態から事態へと因果が移動することとして、これらの表現を理解している。たとえば、(13b)では、彼が何かを始めるという事態が生じ、それは、詫びを言うという事態を経た結果である。他の例についても同様に、因果関係が経路を移動することとして理解できる。

抽象名詞によって因果の流れの中流部分を捉える例として、by chance, by design, by accident, by mistake などを理解することができる。

- (14) a. Her big Hollywood break came by chance.
- b. ...it is unclear if the device was detonated by design or went off by accident....
- c. She fired the weapon by mistake....
- d. ...by chance...I picked up a copy of the Hindu text....

これらの文においては、事態の連鎖における因果の流れの中で、最下流に動詞が表す事態を置いて、そこからさかのぼったところに、前置詞 by によって偶然(chance)、故意(design)、事故(incident)、誤り(mistake)などを位置づけている。

計量単位を表す用法と言われる by the hour, by the kilo などについて、ここで考えよう。たとえば、(15a)は、法律家は時給で支払いを受けると言っている。また、(15b)は、警備状態が一時間ごとに悪化すると言っている。いずれも、by the hour が時間という単位を表す用法である。

- (15) a. Lawyers get paid by the hour....
- b. The security situation gets worse by the hour....
- c. 'Sorry madam, we only sell by the kilo'

今までの説明をこの種の表現に当てはめると、ここでも移動経路のスキーマが想起されていて、(15a)では、下流で法律家が給与を得る (Lawyers get paid) という事態が生じるのを眺めてから、中流を見ると〈途中〉に the hour があるということになる。この文の解釈は、それだけでは不十分であり、〈途中〉の the hour は、時を計る単位の集合 (minute, hour, day, week, month...) が背景に存在して、その中から選ばれている¹⁰。表現の背後には、このような概念構造があり、それを背景にして by the hour が前景化している。注目すべきことは、時間の単位に関する何らかの意義が前置詞 by に内在するのではなく、このような文を理解する話者が、文の意味を成立させるための背景として計量単位の集合を想起する点である。by の意味自体には変化がない。

6.2. 経路をたどる

移動経路に関する前節での考察は、力の移動から始まり、因果関係を通して単位表現の解釈で終わった。この順に、抽象度が高まるにつれて、移動のイメージスキーマがはたらいていることが分かりにくくなると思われる。本節では、移動に際して具体物や影響力が伴わない事例をさらに観察する。以下で見る例においては、認知の主体である話者が、背景となる概念の中に移動経路を見出して心的にたどる。その経路の〈途中〉を by が表している。

はじめに程度や差を表す用法を見よう。by は、LDCE 5 によれば、変化や差異の大きさを表すために用いられる (used to show how great a change or difference is)。この用法では、認知主体は、by 句を理解する前に、ある概念構造を既に背景として思い描いている。その上で、その構造の中にふたつの点を認識し、移動のスキーマを用いて一方の点から他方の点に心的な移動を行う。その移動経路の〈途中〉を by 句が数値によって表現する。たとえば、(16a) では、主体が家屋の値下がり認識し、値段のグラフ上を元の値から今の値まで下方に心理的に移動する。その〈途中〉の長さが by 30% という句によって表されている。また、(16b) についても同様に、利率の変化を数値の尺度上の移動として理解できる。

- (16) a. California house prices fell by 30% in the year to May.
 b. Six central banks...have cut interest rates by half a percentage point....
 c. Tiger misses his birdie putt by an inch on the right....
 d. ...they won the 1,500m relay by over three seconds.

(16c) では、ゴルフコースのグリーンが想起されていて、主体がボールとカップを見てその間を心的に移動し、その〈途中〉が by an inch によって表されている。場面全体としては、結局、それが僅かな距離として解釈されることになる。(16d) では、結局、リレー競走の1位が2位に3秒以上の差をつけて勝ったということになる。認知主体は、勝者のゴールした時点から2位の時点へと心的に移動し、その〈途中〉が3秒以上であることを by 句によって表現している。これが差と解釈されている。これらの例は、差異が移動によって認識されること、その経路を by 句が指定することを示している。

寸法を表すと言われる by の用法も、面積や容積を理解する際に移動のスキーマがはたらいていることを示している。(17a) では、湖の面積が75マイルの長さで、その長さが幅の方向へ35マイル移動することによって認識されている。幅は、長さが移動する〈途中〉として by によって捉えられている。(17b) では、箱の大きさが、長さを幅の方向に移動し、その結果としての面積を高さの方向に移動することによって捉えられていると考えられる。ここでも by は心理的な移動の〈途中〉を表している。

- (17) a. The lake is about 75 miles long by 35 miles wide.
 b. The box...measures just 7 feet by 7 ft by 3 ft...

人は根拠に基づいて判断をする。人の思考が、根拠から判断へと流れる移動の一種であると見なされるとき、そこには移動のスキーマがはたらいっていることになる。たとえば、(18a)では、彼の表情を根拠にして彼の気持ちを判断することができるという。(18b)では、私の腕時計を根拠にした時刻の判断が表されている。(18c)では、法律を根拠にして水道供給に関するある種の判断を行っている。いずれの例においても、下流の判断に至る前の中流の根拠を by 句が表している。

- (18) a. But you could tell by the look on his face that he hated the idea....
 b. It's 1 minute past 4 by my watch....
 c. By law water supplies cannot be cut off for non-payment.

つぎの例も、上と同じように思考の流れが関与している事例である。ここにも、根拠に基づいて判断を表明するという思考の流れがある。(19a)では、生まれに基づいて自分の所属を判断している。(19b)では、職業によって自分が何者であるかを、また、(19c)では呼び名と性質によって町か村かを判断している。

- (19) a. Although I am a Scot by birth I have lived in Yorkshire for over thirty years.
 b. I'm a teacher by profession, but I do any job...to make ends meet.
 c. It's a city by name but a village by nature....

以上で、by 句が移動経路の中で区域を指定し、その経路がメタファーを介して抽象的な領域に写像されると考えられる事例の観察を終える。by を用いた比喩的用法の主なものが、移動経路のスキーマによってどこまで統一的に理解できるのかが明らかになったことと思う。

7. おわりに

本論文では、前置詞 by には生活空間における具体的な意味がひとつあるだけであり、その他の使用法は、すべてそこから派生した現象であることを示してきた。まず、時間的用法は、空間的意味における意味構造をメタファーによってそのまま時間領域に写像した使用法であると考えた。これによって、時間的用法にある〈特定の時の前に〉という区域の偏りに説明を与えることができた。さらに、空間的用法の中に、3次元空間ではなく、1次元空間で用いる事例があることを観察して、by の3次元的区域の意味が、1次元的移動経路、すなわち〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマ内部で使用されて、その区域が移動経路の〈途中〉と解釈されることを示した。by を組み込んだこの移動経路が、メタファーによって具体的空間から抽象的空間へと写像されることによって、by の使用領域が多様化することを見てきた。

by の意味を具体的で身体的な意味に限定し、その他の用法をそこからの派生として扱うためには、豊かな認知過程の存在が前提となる。たとえば、空間の種類としては、3次元物理空間に加えて、時間領域、1次元的移動空間、事態の因果関係、思考の連鎖などの概念が必要になる。さらに、それらを結ぶメタファーとメトニミーの能力、概念構造を思い描く能力、概念構造の中を移動する能力などが、by という一語の意味とは別に存在することになる。このような様々な認知能力が

存在することによって、それらの相互作用の結果として、前置詞 by の多様な使用が可能になると考えられる。

前置詞の用法に関する記述は、語彙的研究によって綿密に行われてきた。さらに、前置詞の意味記述のための理論的研究も進んできた。今の段階では、ひとつの前置詞の意味を記述する際、ネットワークによる分析が主流を占めているように思われる。しかし、意義のネットワークによる分析に頼るばかりでは、用法間の関係の記述が十分になされないままになる可能性があり、また、意義の細分化に向かうばかりになる恐れもある。そこで、前置詞の意味研究を整理するひとつの方向として、ひとつの前置詞にひとつの意味を認める立場をとり、一般化できることがらは、個別の前置詞の意味から抜き出して、より一般的な認知過程に帰することを目指すことが考えられる。もし、この方向の研究が進めば、前置詞の意味に関する理解は、より一般的で、より単純なものとなるであろう。

注

1. ネットワークまたは放射状構造による前置詞の意味分析は、特に over に関して Brugman (1988 [1981])、Lakoff (1987)、Tyler and Evans (2003) 等によって行われている。辞典としては、瀬戸 (2007) がある。
2. 前置詞に唯一の意味を認める試みについては、嶋田 (2008, 2009) を参照。そこでは、over, above, for, to, at, up の図式的意味が論じられている。
3. 前置詞に典型的意義のみならず包括的抽象的意義を認める研究として Langacker (1999: Chapter 3) があり、そこでは、前置詞 of に〈本質的關係〉(intrinsic relationship) という抽象的意味が与えられている。しかし、本論における by の分析においては、このような抽象的な意味は無いと考える。
4. 本論で用いる例文は、BBC News を資料として検索サイト Google によって得た使用例に基づいている。
5. 前置詞 by を理解するために「視座」が必要であることは、by を near と比較する際に論じた。嶋田 (2010) を参照。
6. メタファー理論および時間のメタファーは、Lakoff and Johnson (1980) および Lakoff (1987) に拠る。
7. Langacker (1987) 等の枠組みに従う研究によれば、前置詞の意味は、トラジェクターとランドマークの関係概念であり、たとえば、a table by the window という句において、前置詞 by はテーブル (trajector) と窓 (landmark) の関係そのものを表していることになる。しかし、トラジェクターが前置詞の意味の一部であると考えする必要はない。トラジェクターは、別の認知作用によって前置詞の指定区域または方向に位置づけられているのである。このことについては、嶋田 (2008, 2009) を参照。
8. 〈起点-経路-到達点〉のイメージスキーマについては、Lakoff (1987: 275)、Lakoff and Johnson (1999: 32-34)、山梨 (2000: 79-80, 151-152, 164)、山梨 (2009: 93-112) を参照。
9. Langacker (1990, 1991) は、ビリヤードボール・モデル (billiard-ball model)、アクションチェーン (action chain)、スコープ (scope) などの概念を用いて、文の主語と目的語に意味概念に基づいて定義を与えた。
10. この用法の解釈において、度量衡単位の集合が前提となることは、織田 (2002: 110-112) が記している。

参考文献

Brugman, Claudia M. 1981. *The Story of Over*. MA Thesis, Department of Linguistics, UC Berkeley. Published in 1988 as *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of*

- the Lexicon*. New York and London: Garland Publishing, Inc.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume I, Theoretical Prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II, Descriptive Application*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- 織田 稔 2002. 『英語冠詞の世界 英語の「もの」の見方と示し方』東京：研究社
- 嶋田裕司 2008. 「前置詞の意味構造－空間の中の区域と方向」山梨正明他(編)『認知言語学論考No.7』東京：ひつじ書房 45-93.
- 嶋田裕司 2009. 「前置詞 for の意味－to の意味と対比して－」『英語語法文法研究』第16号 21-34.
- 嶋田裕司 2010. 「前置詞 by の意味－near の意味と対比して－」『群馬県立女子大学紀要』第31号 (37)-(44).
- 瀬戸賢一(編) 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館
- Tyler, Andrea, and Vyvyan Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版
- 山梨正明 2009. 『認知構文論－文法のゲシュタルト性』東京：大修館書店
- LDCE 5 = *Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth Edition. Pearson Educational Limited. 2009.

[言語資料]

BBC News: <<http://news.bbc.co.uk/>>